FAIRYTAIL×BLEACH≪FAIRYCh(フェアリーチ)≫妖精達を守る漆黒の刀

月牙天衝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ×ＢＬＥＡＣＨ≪ＦＡＩＲＹＣｈ（フェアリーチ）≫妖精達を守る漆黒の刀

【Ｎコード】
Ｎ７４０７Ｗ

【作者名】
月牙天衝

【あらすじ】
俺、雷（いかずちやいば）　刃はテンプレ的に死んで、テンプレ的に力をもらい、テンプレ的に転生した。転生先はＦＡＩＲＹＴＡＩＬ（フェアリーテイル）で、力はＢＬＥＡＣＨ（ブリーチ）の力を手にいれた。念願の夢だった死神の力を手に入れたから原作介入は当たり前！縦横無尽に暴れまくるぜ！！！　これは、ＦＡＩＲＹＴＡＩＬとＢＬＥＡＣＨのクロスオーバーで、原作崩壊、キャラ崩壊、ハーレム、主人公チートネタです。苦手な方は控えてください。初投稿なので、駄文、無駄な文、誤字等があると思いま

すが優しい目でみててください。それでは、FAIRYCH（フェアリーチ）をよろしくお願いします。

第０話　主人公誕生（前書き）

はじめまして、月牙天衝です。ブリーチが好きなので、フェアリーテイルの二次創作を書いてみました。
初投稿なので、読みにくかったり、駄文が多いと思いますがよろしくお願いします。

それでは、フェアリーチ第１話はじまり、はじまり～

第０話　主人公誕生

俺は眠ってて、目をさましたら、目に入ってきたのが真っ白な空間だった・・・・・・・・・・・・・

なにこれ？・・・・・・もしかしてあれか！？赤信号を無視して渡ったら、案の定車にひかれて死んだから地獄の門の一歩手前なのか！？はぁ～～～・・・・・・・

いつもだったら赤信号の時は止まって、右見て、左見て、手を挙げて、さぁ！！渡ろう！！！！！！

・・・・・・・・・・・・いや、流石にそこまでやんねーよ、小学生じゃあるまいし。

あっ、でも友人とかには「お前、見た目大人っぽいけど精神は小学生並みだよな（笑）」って言われたな・・・・・・って、そうじゃなくて！あの日は前日にバイトに出て、珍しくハードで某カードゲームのウルトラマン≪ネ○ス≫並みに出ていたから、疲れすぎて帰ったらベッドへ即ダイブしたんだ。そしたら遅刻完璧の時間まで寝てたんだ。それで、急いでいたらひかれて死んだと、状況把握おしまい！！

しかし、何もあの日に死ななくてもな～

だって、ＢＬＥＡＣＨのアニメが放送する日だったんだぜ！！毎週見てたし、ＤＶＤも買ってたんだぞ！！それを見逃すとか・・・・・・はぁ～～～・・・・・・死ぬ前に死神の力を使って縦横無尽に暴れたかったな～、ま、はかない夢だけど。

俺ははかない夢を捨て、横になってた体を起こす。ていうか、今ま

でずっと横になってたな俺・・・・・
辺りを見渡すと、相変わらずの白い空間が広がっており、そして、俺を囲むように3mはあるドアがいくつもあった。
しかし、白い空間にドアって結構異様だよな。トビラとかだったらまだ分かるけど。

「起きたんだ。」

不意に空から声が聞こえた。俺は驚いて上を向いた。

やべぇよ・・・・・・

だって、空から、透き通るような純粋でクリクリした水色の目とツインテールの髪をした幼女(ロリ)が舞い降りてきているのだから!!
・・・・・・・・・・失敬、失敬、幼女ではなく少女が舞い降りてたよ。

幼女・・・・・ではなく少女は俺の目の前に着地し、少女は俺を見る。
俺は起き上がったばかりだから、俺は見上げる、少女は見下ろすような形になった。
すると、少女はいきなり目の前で土下座をして、
「すみませんでした!!!!」
と、謝る。

・・・・・・・・・は?
何、いきなり土下座なんかして。俺、この子に何かしたのか!?
俺はロリ好きだが、土下座をさせる程Sではないぞ!
逆に、優しくオブラートに包んでいって、抱擁力で襲う方だぞ!

・・・・・危ない思考は止めて、土下座を止めさせないと。

「土下座なんかしないで顔を上げてくれ。俺が君に何かしたのか？」

「いえ、違います！！私はあなたを殺してしまったんです！！」

あぁ～～～。あれだろ、間違って神に殺されてしまったパターンか。なんともテンプレ的だね。

そうなると、説得すればもしかしたらはかない夢だったＢＬＥＡＣＨの死神の力が手に入るかもしれないな。

そんなことより、本当に土下座を止めさせないと。罪悪感丸出しである。

「あれだろ、間違ってやっちまったことなんだろ？だったら俺は怒んないし、寧ろ許すよ。俺は」

「・・・・・殺したのにですか？」

「それでもだよ。それで、今度からは間違わないようにすればいいじゃないか。」

俺が言い終わった瞬間、少女はガバッッ！！と顔を上げて俺に抱きつく。

ヤバい！これは理性に対して破壊力抜群過ぎる！！少女は涙目で俺を見ながら言う。

その姿は、普通の人だったらコロッとイッちまうだろう。俺は、死神の力を手に入れる為に理性は失わない。

「あなた様は神のような方です／／／殺してしまったこの私を許す、その心の広さはまさに神様です！」

「そんなことねぇよ。君だって女神様だろ？」

「そんな・・・・・／／／／／

私があのような綺麗な方になるにはもっと修行が必要なのに・・・・・

女神だなんて・・・・・／／／／／」

少女・・・・・でもなく、幼女・・・・・でもなく、女神は涙目のまま照れて俯いてしまった。その頬は少し赤く、口元が緩んでる。うん、普通に可愛いね。また、理性ゲージが減って今は半分切った所だ。これ以上減らされたら危ないかもしれないな。

「あの～、いつまで抱きついてるの？」

「・・・・・ウフフ・・・・・女神だなんて・・・・・初めて言われた・・・・・フフフ・・・・・／／／／／」

あれ？聞こえてない？何か呟いてるけど・・・・・

「おーい、大丈夫か？」

「・・・・・フフ・・・・・フフフ／／／／／・・・・・って、は、はい！何ですか？」

「いや、いつまで抱きついてるのかな～と思って」

「えっ？・・・・・っ！！／／／／／」

やっと自分の状態に気づいたか。しかし、気づいた瞬間のあの表情は写真で納めておきたいな。それ位可愛かった。しかし！！カメラ

が無くても俺の脳内メモリーに焼き付けたぜ！！これで毎晩、夢の中で見れるぜ！！
そんなバカなことを考えていたら、突然、女神は俺からバッッ！！と離れる。しかし、少しショックだな・・・。そんなに拒否反応示すなんて・・・・・。けど、理性ゲージが徐々に上がってきたから良いんだけど。
すると、女神は俺にまた謝ってきた。

「すっ、すみません！！そんなこと言われるとは思わなかったので、つい！！」

「いや、大丈夫だ。寧ろありがたかったよ。」

「・・・・・ッッ！！（いきなり抱きついたのに）ありがたいなんて・・・・・そんな／／／／／（私なんかでよかったら何回でもあなたに抱きたいですぅぅぅ／／／／／）

いやぁ、本当にありがたいよ。あのまま抱かれ続けていたら、理性ゲージ０になって襲っていたよ。そしたら、今頃警察のお世話になっているね。うん。
そんなことを考えていたらいつの間にか女神はまた頬を赤くしながら俯いてしまった。あらら、、、
俯いてしまった女神を俺は改めて見る。
さっき話した通り、クリクリした水色の目、同色のツインテール、すごく可愛い顔立ち、身長は俺の腹辺りで白いスーツとマントが一体化したような服を着ていて、純白で無地なスカートを履いており、黒いブーツが履かれている。
白い服装なのにブーツだけ黒いってどうなの？という疑問はスルーして、俺は最後にまた女神の顔を見詰める。
うーーーん、この顔どこかで見たことあるなー、と思っていたらこ

ちらの視線に気付いたのか女神は頬を赤くしながらチラッとこっちを見てくる。

「あっ、あの・・・・・何でしょうか？」

どうしようかな・・・・・。本当のことを言おうかな、それとも、可憐に見えるからからかっちゃおうかな・・・・・やっぱり本当のことを話そう。からかうと可哀想だしね。

「いや、意外だな～と思って。君みたいな可愛い娘が女神と言われないなんて。」

全く、本当にこんな可愛い娘が女神と言われないのが不思議でしょうがない。生んだ母親の顔が見たいわ！そして、母娘共に襲っちゃおうかな～。へへ・・・・・・・・・・・・・・おっと！不味い、不味い、また思考がおかしな方向へ行こうとしてしまった。

俺が思考修正をしたら女神は、ボンッッ！！！と顔を苺より赤くなって、数秒後、頭からプシュ～っと湯気を出して呆けてしまった。

「エ、エへへ／／／／／／・・・・・可愛いって／／／／／／・・・・・今までで一番幸せです～／／／／／／」

「お、おい。大丈夫か？」

「エ、エへへ～／／／／／／私は大丈夫ですよ～。大丈夫だから抱いちゃいます！！！／／／／／」

「お、落ち着け！全然、大丈夫じゃないだろ！！」

俺は、抱きついてくる女神に対して、手で肩を掴み制止させる。
これ以上抱かれたら俺の理性がオーバーヒートしてしまう。
十数分の格闘の末、女神が理性を取り戻してくれた。そしたら頭を抱えて落ち込んでしまった。

「うぅ・・・・私は、神失格です」

「そう、落ち込むなよ。元気だせって、なっ！
それより俺はどうしたらいいんだ？教えてくれないか？」

俺がはげますと、女神は俺の方を見て、パァァ、と顔を明るくさせて「はいっ！！」と満面な笑顔で答えた。
うん、うん。やっぱり笑顔でこそ女神でしょ。なんだか自分がロリ好きからお兄ちゃんキャラになってきてるような・・・・きのせいか？
俺が疑心暗鬼になっていると女神は、スクッ、と立ち上がると俺に言い放った。

「あなた様には転生してもらいます。それが神が唯一、償えることなのです。さらに！あなたには特別に願った力と容姿、記憶を残してあげます！」

「ほ、本当か！ありがとう！！」

そう言い、俺は女神の手を握る。女神は収まってきた赤みがまた赤くなるが、今度は俯かずに俺を見詰める。

「あなた様には私を許し、さらに、はげましてくれました。この位当然です／／／／／」

「そ、そうかな。けど、ありがとな。さて、力なんだけどＢＬＥＡＣＨの一護の力と鬼道を全て使える力で容姿は無月を習得した一護がいいんだけど、できる？」

「もちろん！あなた様の為だったらお安い御用です／／／／／（しかし、あの時の一護の姿ですか・・・うぅ・・・今でそこそこかっこいいのにさらにかっこよくなちゃうよぉぉ／／／／／）

よっっしゃぁぁぁぁぁ！！！！！念願の夢だった死神の力ゲットだぜぇぇぇぇぇぇ！！！！！

（ピッピカチュー！）

うるせぇ！てめぇは黙って、ひっこんでろ！！！

・・・・・・・・・・・・・・・ふぅ、やっと落ち着けた。読者の皆様、主人公が変な狼狽っぷりを見せてすみません。（ぺこり）けど、これで縦横無尽に暴れるぜ！・・・って、そういえばどこに転生するか聞いてないな。作品によちゃぁ暴れるとアウトのやつもあるしな。だから、女神に聞こうと思ったけどまた顔を真っ赤にして俯いていたよ。しかも、なんか「あう、あう～」と悶えている。全くこいつは、と思いながら女神に聞いてみる。

「なぁ、ところで俺はどこに転生するんだ？」

「あぅ～／／／／・・・・・これ以上かっこよくなったら・・・私・・・私～／／／／／・・・・・ひゃい！！！え、えっと、転生先ですか！？転生先はＦＡＩＲＹＴＡＩＬという所です！」

・・・・・・・・・・・・・・・は？

マジか！！？ＦＡＩＲＹＴＡＩＬは俺の好きな漫画ベスト５に入るぞ！

俺が少し呆けていると女神は「えいっ！」と手をかざして次々と周りにあったドアを消していく。最後に1つの古ぼけたドアが残り、勝手に開いた。これこそ本当の自動ドア、なんつって！（笑）・・・・・すみませんでした。つまんなかったですね・・・・・
俺が1人で白けていると女神はドアの横に立った。

「この中に入れば転生されます。」

女神はそう説明する。俺は、ドアの方に歩き、あと1歩の所で立ち止まる。なぜなら、女神が俺の服の裾を掴んできたからだ。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

この場合、俺はどうしたらいいか分からない。振り払ってそのまま行くか・・・・・ダメだ、可哀想だ。抱きつくか・・・・・ダメだ、相手に嫌悪感を与えてしまう可能性がある。いっそ、襲うか・・・・・さらにダメだろ！何考えてんだ！バカ！！
数十秒の沈黙の末、女神が口を開いた。

「・・・・・どうしても行ってしまうのですね。」

「・・・・・あぁ。そうすれば、女神の罪は償えるし、せっかく願った力がもったいないからな。」

「なら、行く前に抱いてもらってもいいですか？」

「・・・・・え？」

俺は耳を疑ったのかと思って女神の顔を見る。その顔は涙目の上目使いで見てきた。
うっ・・・・・こんなの反則だろ・・・断れねぇじゃねぇか。

「・・・・・分かった」

「ありがとうございます！！！」

女神は太陽な笑顔で答えた。そして、俺は、スッ、と女神を優しく包む。女神は俺に体を預けて心地良さそうにしてた。
あ～～～、ヤベ～～～。この抱き心地、癖になりそう。
数十秒後、女神は自分から離れた。

「ふわぁ～～～・・・もう・・・・・大丈夫です。」

「そうか、そりゃよかった。なら、俺は行くぜ。」

「はい・・・いってらっしゃいませ！」

女神は最初、少し悲しい顔をしていたが、いつも通りの明るく可愛い顔になった。俺はそれに対して親指を立てながら、ドアに入っていく。
ドアの中は光に覆われていて俺が入った途端、体がどんどん光に包まれていく。その途中で女神が思い出したようにドア越しから叫ぶ。

「あっ、力と容姿と記憶を残すのに私の力を使ってしまったので、多分、転生した瞬間の環境は最悪だと思うので気を付けてくだ～い！」

な、なんだよそれ！！そんなの聞いてなっ・・・・・・・・・・・・・

・・・

俺はそこで気を失った。

第０話　主人公誕生（後書き）

いや～、ひどいですね（笑）
感想、ご指摘、意見などありましたらドンドンお願いします。

次回は、主人公設定です。

主人公設定　（前書き）

どうも、月牙天衝です。

いやぁ～前話はひどくてすみませんでした（汗）
小説執筆初心者なものなので、どんな感じで書いたらいいかわかりませんでした。
でも、練習として書いてみたら大方わかってきました（ガッツポーズ！）
友達からも指摘を嵐のように受けたので、注意しながら書いていきたいと思います。

さて、前書きはこの位にして主人公設定の紹介です。
見づらいかもしれませんがご了承ください。

主人公設定

名前　雷（いかずちやいば）　刃

年齢　転生前１７歳→転生後６歳

容姿　無月を会得して藍然と対峙した時の黒崎一護（オレンジで髪が少し伸びた状態）子供の頃の一護の顔に伸びた髪を張り付けた感じ。

性格　温厚で優しく、仲間思いが強い。原作の一護と違い無愛想ではなくよく笑顔を見せる。時々、原作の一護のような言動が出る。原作にどんどん介入するほど物事やイベントに積極的。戦闘中の頭は良く冴えるが普段はバカな点が多い。そのせいもあってか、ここぞ！という時は鋭いが鈍い時はとことん鈍い。好きなものは仲間、平和、一生懸命作った手料理、酒。嫌いなものは悪、差別、マヨネーズ。

使える魔法

《死神化》

　普段の服装が消え、白装束の上に黒い衣を羽織り、《斬月》を背負った状態となる。普段の戦闘スキルが2倍になる。

《斬月》

　巨大な出刃包丁。《死神化》すると同時に包帯に包まれながら背中に背負ってる。戦闘時も柄は包帯で包まれている。原作同様、コートに身を包んだサングラスのおっさんがいる。

《卍解》

　《死神化》の服装が消え、腹に包帯を巻いて黒いロングコートを羽織ってる。《天鎖斬月》を持った状態。スピードと魔力のス

キルが格段に上がる。パワーが若干落ちる。次の日は魔法が使えないデメリットがある。

《天鎖斬月》

細くて黒い黒刀。重みのある大刀から細くて軽い刀にしたお陰でパワーの分がスピードに加わった。柄は黒色でダイヤのような絵柄が刺繍されていて、先にチェーンがのびている。

《無月》

《卍解状態》の服装が消え、黒い鎧に黒いマスクをつけている。髪はオレンジから黒に変わり、長さも腰辺りまでのびている。全てのステータスがＭＡＸに上がり、一振りが最大で街を消せる威力。

但し、一振りが限界。修行すれば、もしかしたら…！？ちなみに、死神の力は消えない。次の日から3日間魔法が練れず、寝込んでしまうデメリットがある。

《鬼道》

平常時は四十番台までのと有名な鬼道（赤火砲や断空など）の弱体化版しか使えないが《死神化》すると全ての鬼道が使えて詠唱破棄してない状態でだせる。主人公は詠唱がわからないから詠唱破棄のままだす。

主人公設定　（後書き）

主人公設定は話が進むに連れて変わったり、補足したりすると思います。

あまりにもチートすぎるのもな～と思い、少しデメリットを付けました。
まぁ、それでもチートですけど（笑）

さて、次話はなんと原作過去篇からはじまります。
過去で刃は何をしでかすのしょうか。
内容は頭の中で大体出来てるので、早く投稿できると思います。
それでは、また会いましょう～

過去篇　第1話　最強の奴隷、降臨（前書き）

どうも、月牙天衝です。

連続投稿してみました。

腰が痛い・・・

それでは、どうぞ。

過去篇　第1話　最強の奴隷、降臨

・・・・・・・・・・・・・・・暗い
何も見えない・・・・・・辺り一面真っ暗だ・・・・・・
なんだろう・・・・・・体が揺れる・・・・・・腹に違和感を感じる・・・・・・俺は何もしてないのに・・・・・・なぜだろう・・・・・・
・・・・・・声が聞こえてくる・・・・・・徐々に大きくなって・・・・・・
・・・・・・光が見えてきた・・・・・・
そして、俺は目が覚めた。最初は薄目でよく分からなかったが徐々に意識が晴れてくる。どうやら魔法使いらしき人にかつがれているようだ。
しかし、俺はなぜかつがれているのだ？確か学校へ行く途中ではなかったか？こんな宅配便の荷物になった覚えは無いぞ。
俺は周りを見てみる。周りには牢屋、牢屋、牢屋、牢屋、牢屋だらけ。目立つものや目ぼしいものは何もない。それと、たくさんの老人や女、子供が手足に鎖で繋がれて歩いていた。その顔はとても暗い。俺もその内の1人らしく鎖で繋がれて・・・い・・・た・・・
「なんじゃこりゃあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！」
俺はこの牢屋の施設全てに伝わるような大音量をだした。周りがそ

れに驚く。俺だって驚いてるよ！！だって・・・だって・・・見たら手や足が６歳児並みのミニマムサイズになってるんだもの・・・

「うるさいぞ！起きたのならさっさと歩けガキ！！」

俺をかついでた魔法使いらしき人は小柄な俺を床に投げ捨てた。もう１度言うぞ、小柄な俺を、だ。

「いってーな！なにすんだよ！」

「うるさい！起きたのならさっさと歩け！」

魔法使いらしき人はそう言うと俺を置いていこうとした。って、待て待て待て待て待て待て待て！

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ここは一体どこなんだ！？」

「・・・お前、ここがどこだかわからないのか？ここは楽園の塔だよ。」

「ら、楽園の塔！？それはフェア・・・はっ！？・・・」

思い出したぞ！そうだった、俺はフェアリーテイルに転生したんだっけ。ということはこの鎖と身長もわかる気がする。今の俺はエルザ達と同い年で奴隷になる、というところか。女神の最後の言葉ってこういう意味だったのね。全く本当に面倒臭い時代にきたな。そんなことを考えて黙っていると魔法使いらしき人は俺の髪を掴み、引きずった。

「いたたたたたたた！！！剥げる剥げる剥げる！！！」

「質問には答えたんだ。さっさと歩け。それともこのまま髪の毛を無くしたいか？」

「わかった！歩くから！！離してくれ！痛いんだよ！！」

すると魔法使いらしき人は離してくれた。お～、痛かった。

俺はそのまま列に沿って歩いた。歩きながら原作を思い出していた原作でもあいつらは理不尽すぎてしょうがない。奴隷に対して弱いくせに強気だし、話はきかねぇし、おまけに自己中だから最低すぎる。エルザ達はよくこんなのに耐えていたな。

「ほら着いたぞ。さっさと入れ。」

歩きながら考えていたら目的地に着いたらしい。ふと牢屋の中を見る。あれ？あの連中って・・・

「何をしてる。さっさと、入れ！」

ドカッ！

教団の男に蹴られて牢屋に入れられた。

「っつ～～～～～、蹴んじゃねーよ！入ろうとしたのに！」

「うるさいっ、さっさと入らないお前が悪い。さて、新入りだ。楽しくやってけよ。ま、早めに死んであの世で楽しくやってま～す。っていうオチでもいいと思うけどね。アハハハハハハハ！」

「なんだとてめぇ！！」

キ～～～～～

ガシャン！！！

男に襲うとしたが扉を閉められて防がれてしまった。危うくぶつかるところだった。

「くそっ！！！」

男は高笑いしながら去って行った。

あの野郎、今度会ったら叩き潰す！！・・・っと、危ねぇー、危ねぇー、いまの俺のキャラじゃない。落ち着け、冷静になるんだ。深呼吸～、スゥー、ハァー・・・・・よし！もどった。

周りを見ると皆俺の方を凝視している。

やっぱりまずったかなー、あの暴言は。俺は熱くなると一護並みの暴言を発する時がある。これのせいで幾度となく失敗したからなー。不良に絡まれたり、先生には目をつけられたりで色々大変だったぜ。

「え～～～と、お、俺の名はいかづ・・うぉ！？」

俺が自己紹介をしようと思ったらいきなり人に囲まれた。なんだなんだ！？俺に何するつもりだ！？

「すごいよ！あの人達にあんな反抗するなんて！」

最初に髪がはねている背の低い少年が言った。

「しかも、扉さえ閉じなければ普通に襲えた勢いだ。」
次にセンター分けで後ろ髪が長い少年が答える。
「みゃあー、すごい。」
次におかっぱ頭で猫目の女の子が答える
「ああ、ミリアーナの言うとおりすげえな。」
次に髪が逆立っていてカ〇ジにちょっとだけ似ている少年が答える。
「反抗したのはジェラールとあなた以外で他にいない。そうだよね、ジェラール。」
赤髪のショートカットの少女は答えた後、後ろを向いて聞いた。
人だかりから少し後ろにいた青髪で顔の右側に模様が描かれている少年は微笑みながら俺に話す。
「ああ、しかも来た初日に反抗とは俺もやらなかったぞ。・・・自己紹介がまだだったな。俺の名はジェラール・フェルナンデス。ジェラールと呼んでくれ。」
「俺はヤイバ　イカヅチだ。好きなように呼んでくれ。」
「なら、ヤイバ。よろしくな。君とは話が合いそうだ。」
「ああ、こっちこそよろしくな。」

俺たちは手を握る。

「僕はショウって言うんだ。よろしくね。」

「俺はシモンだ。」

「ミャア～、ミリアーナ。よろしくぅ。」

「俺はウォーリー・ブキャナン。狂犬ウォーリー様と覚えとけ！」

「私はエルザ、エルザ・スカーレット。よろしくね。ヤイバ。」

「（皆知ってるけどね）ああ、皆これからよろしくな。」

刃の原作介入最強物語、楽園の塔壊しちゃおうぜ。が、幕を開けた。

過去篇　第1話　最強の奴隷、降臨（後書き）

最初の方は調子良かったんですけどね。
集中力が切れてきたというかなんというか、、、、
最後、グダグダでしたね。
しかも、死神の力でてねーし。

ダメですね。ネガティブになっちゃ（笑）
次回こそは死神の力を出したいと思っております。
それではまた会いましょう。

過去篇　第2話　刃、回想（前書き）

どうも～、久しぶりでーす。

あれ？誰も待ってないって？
またまたご冗談を（笑）

さて、前話執筆していたのですがカタカナでヤイバとすると、どうも見にくいということが分かったので今話から刃とします。
優柔不断な作者ですみません。

それでは、今回は回想シーンです。
まだ４話目なのにね（笑）

過去篇　第2話　刃、回想

side刃

エルザ達と出会ってから1か月が過ぎた。
その間に何が起きたか教えよう。

〜〜〜〜〜〜〜〜

―その1―

俺がRシステムもとい楽園の塔に来た次の日、俺は皆と同様に働かされた。
いや、働かされたはおかしいな。
俺はここで修行してるのだ。

だって、数十キロはある木材や石材を2〜3人で往復して運ぶって、普通の人だったら1時間で疲れるよ。それを休憩無しの15時間労働って、常人にできるはずが無いだろう。

ん？俺か？俺はもちろん1人で運んでいくよ。俺には死神の力というチートを持ってるから、この位やらないと疲れないし修行にもならん。
まぁ、周りの目があり得ないという顔をしていたけどな。

さて、飽きるように運んでいたら事件は起こったのだ。

エルザが運んでいるのを見かけて俺が手伝いに行こうとした時に、天井から複数の岩が降ってきたのだ。
皆一斉に逃げていく。エルザもそれで気付いたのだが、エルザの上に岩の塊が降ってきた。

「キャァァァァァァァァァァァァァァァ！！！」

「三天結盾！」

ドゴーーーーン！！！

ふーー、あぶねー、あぶねー、あと1歩遅かったら潰れてたぜ。

俺は皆が逃げる中、エルザを助けるためにあえて落ちる所に駆けていったのだ。そして、エルザをかばいながら三天結盾を展開させた。
いや～、自分でもビックリだよ。頭の中で、防げるもの→盾→三天結盾って思いついて念じたらできちゃうんだもの。

三天結盾で防いだ時に生じた煙が晴れていく。足元でうずくまってるエルザがいた。見ると、若干震えていた。俺は右膝を地面に付けてエルザの肩に触れる。

「大丈夫か？エルザ。」

「・・・や・・・刃？」

「あぁ、そうだ。もう大丈夫だよ。」

「刃ぁ・・・刃ぁぁ！！」

エルザが俺に抱きついてきた。その顔は涙で溢れていた。

そりゃそうか。一瞬でも死を感じたんだもんな。

俺はエルザを撫でながら抱擁する。

「うわぁぁぁぁぁぁん！！怖かったよーーーーーーーー！！！」

「大丈夫。心配するな。俺がお前を護ったから安心しろ。」

エルザは俺に抱擁されながらヒック、ヒックと泣いていた。すると

ジェラール達が集まってきた。

「大丈夫か！エルザ！刃！」

「大丈夫！？姉さん！刃さん！」

「にゃ！２人共！怪我は無い！？」

「無事か！？エルザ！」

「ミリアーナは俺が守る！」

上からジェラール、ショウ、ミリアーナ、シモン、ウォーリーが聞いてきた。てか、ウォーリー、お前俺らよりもミリアーナか！お前の頭はどんだけミリアーナに浸食されてんだ！

ウォーリーにツッコんでいたら、大分落ち着いたエルザが皆に答えてくれた。

「皆、大丈夫だよ。怪我はない。刃が助けてくれたからね。心配してくれてありがとう。」

「そうか・・・よかった。さすがだな刃。」

「姉さん、刃さん、２人共無事で良かったよ。」

「にゃあ、刃すごいぃ。」

「それでこそ我が宿敵（ライバル）だ。」

「お前はエルザを守った。今度は俺がミリアーナを守ってみせる！」

こんなチート野郎に皆誉めてくれるなんて嬉しいぜ。

それで、シモン、俺はいつからお前の宿敵になったんだ？そう思ってくれるのは嫌いじゃないけどね。

ウォーリー、お前けっこういい言葉言ってるけど状況を考えような？お前だけだぞ。場違いな言葉発しているの。

そしたら遠くから声が聞こえてきた。

「おい！貴様ら！何を集まっている！そんな時間があるのなら物を運べ！」

「ちっ！自分らも逃げてたくせによ。よく言うぜ。」

「うむ。全くだ。我が宿敵を見習ってほしいものだ。」

「でも、行かないとまた怒られるよ・・・」

「にゃぁ・・・。しょうがない。２人は落ち着いたら来て。」

「ミリアーナの言うとおりだぜ！落ち着いたらすぐ来いよ！」

「あぁ、分かった。すぐに行くよ。」

「うん、ありがとう。皆。」

ジェラール達は自分たちの持ち場に行った。

本当にいい仲間を持ったよ。そして、ウォーリー、お前うるさい。ミリアーナの言葉を繰り返さなくていい。普通に理解できるから。

エルザが少し顔を俯いている。どうしたんだ？

「エルザ？どうした？」

「い、いや・・・いつまでこの格好なのかなって・・・・・・・／／」

今俺とエルザの状況は俺がエルザを抱きかかえている状態。片膝付いているが、ちょっとしたお姫様抱っこ状態。

「それもそうだな。それじゃ、よっと！」

俺はエルザを立たせる。

「あ・・・・もうちょっと続けてもよかったのに・・・」

「ん？何か言ったか？」

「う、ううん！何でもない／／／／・・・・・・・刃、ありがとね。助けてくれて。」

「なぁに、気にすんな。いつでもどこでもお前を護ってやるから。安心しろ、エルザ。」

「・・・・・（ぷしゅ～～～）」

エルザが俯いて湯気を出してしまった。

仲間だから当然のことを言ったまでなんだけどな～。しかたない引っ張っていくか。

俺はエルザの手を掴んだ。

「！？・・・／／／／／」

「ほら、行こうぜ。エルザ。」

「う、うん・・・／／／」

こうして刃はエルザにフラグ立たせたのであった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

―その2―

俺は眠ると同時に心相世界に飛び込んで、斬月と一緒に戦えることができたのだ！
これなら眠ってる間も強くなれるからね。
しかし、初めて行った時は大変だったぜ。

「貴様・・・もしや、刃か？」

「そうだけど、どうしたの？」

「こんな少年の頃から・・・心相世界に来れるとは・・・考えてなかったからな・・・」

「まぁ、いいじゃねぇか。それよりも卍解のやり方を教えてくれ。」

「・・・・いいだろう・・・私の修行に・・・ついてこれたらな。」

「やってやるさ！・・・え〜〜〜と・・「斬月だ」よろしくな！斬月！」

で、ここまでは良かった。だけど修行始めると・・・

「ちょ！斬月！こんな狭い結界の中で、大量に飛んでくる刀を避けるなんて無茶振りにも程があるぞ！」

「問答無用だ！」

「ぎゃぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁあぁ！！」

またある時は・・・

「この地面に刺さってる・・・無数の刀から・・・お前が思う本物の刀を・・・探せ！」

「よし！（ペスキスでみつけてやる）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・見つけた・・・・・」

「どこに・・・あった・・・」

「お、ま、え、が持ってるのがそうだろ！探す必要無かったじゃねーか！」

「その通りだ・・・刃よ・・・奪ってみよ。」

「くっそ〜〜〜！騙しやがってーーー！」

と、まぁこんな感じで結構めちゃくちゃだったな。でも、戦術や戦闘スキル、鬼道とか勉強になる所もあったよ。おかげで無月まで習得しちゃったよ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

これが1か月の間に起こったことだ。

そして、今は俺を含めたいつものメンバーで楽園の塔を脱出する計画を立てている。もうすぐ原作介入する時か・・・・・暴れてやるぜ!!

過去篇　第2話　刃、回想（後書き）

相変わらずヒドイ・・・・・
特に最後なんかグダグダだ・・・・・

でも、めげずに頑張ります！

感想、意見なんかあると嬉しいです。キツイ言葉でも構いません。
作者はMで立ち直りが早いですから（笑）

過去篇　第3話　刃、護る（前書き）

どうも！久しぶりです。月牙天衝です。
やっと待ちに待った更新です。
えっ？待ってないって？またまたご冗談を（汗）

さて、実は最近文化祭やバイトとかでなかなか投稿ができないんですよね。
しかも、バイト先はラーメン屋なのでこの時期は本当に忙しいです（疲れ）
けど！やっと一昨日文化祭が終わったので投稿できます。
それでも相変わらずスピードは亀並みに遅いですけど（苦笑）

今話で本格的に本編に触れようと思います。
といっても、作者がヘボいので読みにくいと思います。
それでは5話目始まりです。

過去篇　第3話　刃、護る

ｓａｉｄエルザ

「そう簡単に逃げ出せると思ったか！！！ガキどもがぁ！！！」

私たちは楽園の塔から脱出しようとした。
ここの奴隷の制度は限度を超えていて、過酷だ。
それに耐えきれなくなったショウから脱出の案がでた。
当然、皆賛成した。
そして、ジェラールと刃を筆頭に脱出ルートを導き出した。
私は刃のことを信頼している。けど・・・・・・
どうしても不安が取れない・・・・・・
もし、見つかってしまったら・・・・・そう考えると震えが止まらない。
それでも不安を押し殺して、刃の傍にいる安心感を抱きながら脱出ルート進んでいく。

しかし、神というものは残酷だ。
私が考えていた中で最悪の事態に、今陥っている。

「一刻も早くRシステムを完成させなきゃならねぇこの時に！！」

「まぁ待て・・・・・これ以上の建立の遅れはマズイ。本来なら全員、懲罰房送りなんだがな・・・今回に限り一人だけとする」

私は耳を疑った。
一人だけ・・・・・？そんな・・・・・仲間を犠牲にするなんてで

きるわけがない！けど、こんな状況じゃ逃れることはできない・・・
刃はどうするのだろう。
私はそう思い刃を探す・・・・って、あれ？刃がいない！さっき
までいたのに！ど、どこに行ったんだろう。

「脱走計画の立案者は誰だ？懲罰房へはそいつ一人に行ってもらう。
優しいだろ？オレたちは、ひひひ・・・・・」

立案者はショウ。だけど本人はガクガクブルブルでだめだ。刃だっ
たらすぐに自分が立案者だと言うだろう。だけど刃は今この場にい
ない。だったら・・・・・・

「わ・・「俺だ」！！！」

「俺が計画を立案し、指揮した」

「ほう・・フン・・・この女だな」

「！！！」

え・・・？わたし・・・・・？
私が言おうとしたらジェラールが先に言った。けど、結局私が懲罰
房へ行くことになってしまった・・・怖い・・・・・

「俺だ！！！俺が立案者だ！！！エルザは違う！！！」

「わ・・・私は・・・大丈夫・・・全然・・平気」ビクビクビク！

・・・怖い・・・怖い・・・

「刃言ってくれもん・・・全然怖くないんだよ・・・」ガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガク

・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・

「エルザ―！！！」

「おとなしくしてろぉ！！！」

「た・・・助けて・・ジェラール・・・エルちゃんを助けて・・・」

「あはははははは！！つれてけ！」

「ぐすっ・・・ぐすっ・・ヒック」

・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・・・助けて・・・刃・・・・・

side刃

俺は今、皆とは別行動をしている。なぜかって？そりゃぁエルザを助けるためだよ。あの場だと周りは洞窟ばかりだし、味方がエルザ達しかいないからあえて助けなかった。それに、エルザが皆の戦意をあげないと意味がないしね。あれは多分、フェアリーテイルの名シーンの１つでも思うから、実際にこの目で見たいっていう理由もあるけどね。

それで今、懲罰房の岩の陰に隠れて待ってるんだけど・・・・・お

っ！きたきた。
２人か・・・余裕でやれるな。
「全く、時間が無いってのに脱走なんてくだらねぇ真似するなんてよ。こっちの身にもなれっての！」
「まぁまぁ、落ち着けって。確かに時間が無いのは確かだけどよ、こうやって奴隷を叩いてるだけで普通に暮らせるんだからそこら辺の仕事よりはマシだろ」
ビシッ！
「あぐっ！うぅ・・グスッ」
「ははっ！ちげぇねぇな！ストレス発散にもなるしよ。こんな楽なしごとねぇわな！」
バシッ！
「うっ！・・やめてよ・・・ヒック」
「うーん、でも時間が無いのは事実だしなー。どうする？」
「ならよ。気絶するほどまでの痛さを与えてやればいいんじゃねーの？例えば・・・目を抉るとか」
「いいねー！早速やろうぜ！」
「それじゃー「紐を緩めましょう」よし！紐を緩めよう！」

こいつら腐ってやがる・・・再起不能にするまでぶちのめしてやる！！！

ｓｉｄｅエルザ

私・・・目をとられるの・・・？嫌だな・・・そんな顔、皆に特に刃に見せられないよ・・・そういえば刃ここに来るまででも見なかったな・・・ちゃんと逃げられたのかな・・・・・ごめんね・・・刃・・私逃げれなかったよ・・・

私の目の前に手が迫ってくる・・・さようなら・・・

「紐を緩めましょう」

え・・・？この声は・・・！まさか！

「よし！緩めよう！・・・・・・っじゃねーよ！何者だ！「どがっ」うぐっ！！」

「き、貴様は！な、なぜっ、「ごすっ！」がはっ！！」

どさどさっ

2人は倒れた

やっぱり・・間違えるはずが無い・・・

「大丈夫か、エルザ」

「刃・・どうして・・・逃げたんじゃなかったの？」

「おいおい、俺がそんなやつに見えるのか？トイレに行ってたら皆とはぐれちまって、探してたら連中に捕まっているエルザを見つけたから助けたんだよ」

「そ、そうなんだ・・・助けてくれてありがとう・・・」

なんだか複雑な気分・・・助けてくれたのはありがたいけど、てっきり助けるためにきてくれたと思ったのに。たまたま見つけたってヒドイと思うな。

「それに言ったじゃねーか。エルザは俺が護るって。なんとなくエルザが危ない気がしてたんだ。」

シュル　パサッ

縛ってあった紐を落とす。そして・・・

「もしかしたら俺たちは以心伝心なのかもな」

以心伝心？私と刃が？なんだかとっても嬉しい！刃からそんなこと言われるなんて！

「ありがとう！！刃！！」

ムギュ！

「お、おいおい、エルザ」

「あっ！そ、その・・ごめん・・／／／／／」

はわわわわわ！つい嬉しすぎて抱きついちゃった／／／／／／
は、恥ずかしー／／／／／／

「おい！あそこに倒れているぞ！」

「あのガキがやったのか！」

「捕まえて懲罰房行きだ！たっぷりいじめてやるよ！」

・・・・・せっかくのムード壊された・・・じゃなくて連中がどんどん迫ってくる。せっかく助けてもらったのにこれじゃ意味がないよ。

「エルザ、ここは俺が食い止める。お前は先に戻れ」

「そんな！刃を残して1人で帰ることなんかできないよ。刃も一緒に帰ろう」

「ダメだ。一緒に帰ってしまったらいずれ追いつかれてしまう。だったら迎え撃った方がいい」

「で、でも・・・」

「俺はお前を信じてる。エルザも俺のこと信じることができるか」

「・・・うん、信じられるよ／／／／」

信じれるに決まってるじゃんか！私は刃のお陰でここまでこれたようなものなんだから。

「そうか、ありがとう。・・・エルザ、人は後ろを向いちゃいけない。前へ進むんだ。」

「？。うん、わかった」

「その言葉忘れるなよ。さぁ行け！もうすぐ連中が来る！」

「刃！気を付けてね・・・」

私は懲罰房の横にある脇道へ行く。

最後に刃が言った言葉がイマイチわかんないけど私は急いで帰る。

刃、気を付けてね。絶対、帰ってきてね。

過去篇　第3話　刃、護る（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回、エルザサイドをかいてみたんですがどうでしょう？
自分的にはけっこうやりやすいんですよね、ヒロインサイドから執筆するのって。
ですから、なんだか自然と主人公サイドが少なくなってしまうんですよね（汗）

あと、本格的に本編に入った割にはそこまで進みませんね（泣）いつものことなんですけど（笑）

さて、次回は戦闘の所までかければいいなと思っています。
あと、今話の最後はエルザサイドで終わりましたが、次話はそこの刃サイドをやりたいと思います。

次話投稿はいつになるのやら・・・不安を抱えながら今日はここでさようならです。

過去篇　第４話　刃、導く（前書き）

どうも～おひさ～

すいません・・・少し慣れなれしすぎでしたね。

実は、今回短くしました。
何故ならこれから毎日投稿したいと思ったので、短めにしました。
まぁ、それでも駄文は相変わらずですけどね（苦笑）

それでは、早速本文いってみよーー！
ご賞味あれ！（笑）

過去篇　第４話　刃、導く

ｓｉｄｅ刃

さて、エルザは行ったか・・・・・
しかし、何で助けたのに不機嫌になったんだ？
説得するのに大変だったぞ。

「あのガキだ！！２人もやりやがった！！！」
「チクショー――！！ガキのくせに！！！」
「簡単には殺すな！！見せしめにするぞ！！！」

ざっと１０人程度か・・・・・

「俺の仲間に手を出したこと・・・

すぐにけちらす！

後悔させてやる！」

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ｓｉｄｅエルザ

大丈夫かな刃・・・
きっと大丈夫だよね！
だって刃は強いんだもの！
私はあの場から去って細い裏道を通っている。
もちろんあいつらに気付かれないように。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、や、やっと着いた」

私はやっと皆がいる牢獄へ来れた。
皆、私を見てすごく驚いている。
その中からシモンが心配してやってきた。

「エルザ！無事だったのか！！」

「うん、刃が助けにきてくれたから。・・・ところでジェラールは？」

辺りを見渡したがジェラールらしき人影が見えない。
シモンに聞いたけど俯いて言いずらそうにしている

「ジ、ジェラールは・・・エルザを助けに行ったんだが、すぐに奴らに見つかってしまって・・・多分、別の懲罰房に行かされちまったんだ・・・」

「そ、そんな・・・」

私は絶望してしまった・・・
今までは刃とジェラールの2人が私たちを引っ張ってくれてたのに、いきなり2人もいなくなってしまった

どうすればいいか分からなくなってしまった
するとショウが泣き始めた
「ぐすっ・・・もうやだ・・・もうこんなトコやだあああああぁぁぁ！！！」
うわあああああああああん、と外にも聞こえるくらい泣き叫んだので奴らが入ってきた
「何の騒ぎだーーー！！」
「おとなしくしねーか！クソガキ！！」
ウォーリーや皆ショウをなだめるが、泣き止む様子がない
「落ち着け、ショウ」
「大丈夫だよ、ショウくん。近くにいるからね」
「ほら、泣き止んで。皆心配してるよ」
「うあああああああああん！！！」
私は咄嗟に手で耳を塞いでしまった
今起きてる喧騒や言葉、叫びが全て私にとって不愉快に感じてしまう
自由を手に入れたい・・・そう思った刹那、私の脳裏に刃のあの言葉がよぎった
『人は後ろを向いちゃいけない。前へ進むんだ』

「うわあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！！」

「！！！」

ゴガッ！！

私はいつの間にか動いていた・・・

連中の1人から槍を奪い取り、そのまま切り倒した

そうだ、私たちは前へ進むんだ。戦うんだ！

私は唖然としている皆に言う

「従っても逃げても自由は手に入らない。戦うしかない！！！」

外にいた奴らの1人が叫んだ

「反乱だーーーーー！！！」

私たちはもう後ろは向かない

「自由の為に立ち上がれぇぇぇぇぇ！！！！！」

side out

過去篇　第４話　刃、導く（後書き）

エルザの口調がおかしいですね・・・
でも、作者はこれが限界なので・・・すみません。
あとやっぱり最後がグダグダになりますね。はぁ～～～・・・

さて、これからは短いですが出来るだけ毎日、遅くても3日以内には投稿したいと思います。楽しみにしていてください～。

それでは、また次回に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7407w/

FAIRYTAIL×BLEACH≪FAIRYCh(フェアリーチ)≫妖精達を守る漆黒の刀

2011年11月24日02時45分発行